

# 『呂氏春秋』にみる時令思想の意義とは

——その発展と凋落を追って——

遠 藤 聡 美

## 序章

本論では、時令思想のなりたちから衰退までを取り上げることとする。時令思想は多様に発展した古代中国の思想のひとつである。これは一年四季の性質にそって政治を行っていくという思想である。この時令とは季節に合わせて政治を行っていくとされているため、そのようなことが本当に行えるのか興味を持ったのである。そこでこの戦国時代から漢代に渡って盛行したという時令とは、どういうものだったのか、どのように存在していたのか、疑問に感じたことを探究したいと思う。

まず、第一章では、時令に関する基本的な情報を挙げたのち、他の思想と時令が結びついていく過程を見る。時令思想は、五行思想・天人相関思想・災異思想などと関連がある。その三つの思想が時令とどのように結びついたかを、『呂氏春秋』以前の文献をもとに考察していく。

第二章では、『呂氏春秋』における時令と、諸子百家の思想との関連について探っていく。『呂氏春秋』の時令は「十二紀」に記されているが、そこには時令思想以外の思想もまとめて編纂されている

る。それらの思想が時令とともに記されている理由と、その意味を考察したいと思う。

第三章では、これまで発展してきた時令思想が、その後思想界から、次第に姿を消すこととなった理由について考察する。時令は『呂氏春秋』において、完成の形をとったとされているが、完成にまで至った時令がなぜ顧みられなくなったのか、時令を検討してみることとその理由を探りたい。以上のような流れで時令思想について理解を深めていくことにする。

## 第一章 時令思想のなりたち

——諸思想との結びつきにおいて——

まず、時令とは何か。今回取り上げる時令とは、年中行事、一年中の時節に応じて行う政治上の行事の順序を言い、時令思想とはそれのものとなる思想である。季節ごとの行事は公私問わず四季・寒暖にともなうて行われており、古くから習俗として行われているものが多い。時令とは、こうした習俗を含んで、そのすべてを国家の政令として説くものである。四季にはそれぞれ特殊な政令があり、これに従えば四季の推移も調和し、人事も調和するとされるが、もし

違背した場合には災厄が降るという思想である。ここでは『呂氏春秋』に焦点を当てて、時令のもつ意義を考察したい。

では、対象とする『呂氏春秋』とはどのような書物なのか。この書の成立は秦の時代であり、秦の宰相であった呂不韋によって動員された学者に著作編纂させたものとされている。諸子百家の論説を網羅した、一種の百科全書的著作である。時令思想が説かれるのは「十二紀」においてである。春夏秋冬をそれぞれ三分し、孟春から季冬までの十二巻からなり、その各巻の首篇が時令を記している。内容は、十二月それぞれにおける天文気候などの状況、それに対応した人の為すべき宮中の諸行事、国家の政事、農事の指示などが列記されている。特に注目したところは違令の災について述べている点であり、その季節に従うべき政令を執らなかつた場合、災厄が生じるといふものである。この時令がどのような過程を経て十二紀に至ったかをこの章で取り上げたいと思う。

まず、『呂氏春秋』成立以前の時令を考える。時令の原型は『詩経』幽風の七月の詩にあるような農事暦であるとされる。七月の詩には自然現象とそれともなう人事が記されており、この人事とは農民の生活と関係している。古代の農民生活の実態を反映しており、為政者の立場からする農事暦と思われる要素があることは認められている。また、七月の詩と関係が深いと思われる時令は『大戴礼記』夏小正である。これには正月から十二月までの月々の区分に応じて自然現象や季節の言葉が記しており、その間に人事をはさんだ体裁になっている。しかし、ここではまだ五行思想を見て取ることはできないし、また天人相関思想とのつながりも見えない。とはいえず、宮廷の生活に関係する言葉もあり、七月の詩と比べると全体的に整

備されていて、時令として作られた文章であるような印象を受ける。七月の詩では、季節と農民の生活との関係が重視されていたようだが、時令として発展した形で現れたのがこの夏小正と言える。これらは原初の時令資料として見るができるだろう。

この七月の詩や夏小正を見ても、時令にもともと五行や天人相関などの思想が見られたわけではないことがわかる。では、どのような過程を経て十二紀の時令のように完成した形となったのだろうか。まずは五行思想との結びつきについて考察したい。

## 第一節 時令と五行思想

まず、五行思想とは、五行という人間の日常生活には欠くことができない木・火・土・金・水の五つの元素が、一定の法則に従って循環交代するという考え方である。のちにこれが、中国の歴代王朝の交替に当てはめて変遷の順序を理論づけたり、季節・方角・色など、様々なものに配当されるようになったりするなどして発展していく。漢代では陰陽説とも結びつき、盛んになった思想である。十二紀の時令には、五行説によって万物に五行が配当されている。孟春の例を見ると、

日では甲乙、帝では太皞、神では句芒、動物では鱗あるもの、音では角をたつとび、また律では太族に相応する。数では八、味では酸（すっぱさ）、臭では羶（なまぐさ）をよしとする。家の戸口の神を祀り、祭るには脾臓を初めに供える。東風が氷を解かし、冬籠もりの動物が活動しはじめる。…（略）…天子は明堂の東側、青陽太廟の左にある小房に居り、鸞輅（鳳凰の

飾りのついた天子の車）に乗って蒼龍（駿馬）に引かせ、青旗を飾り、青衣を着、青玉を佩び、麦と羊を食する。その器は透かし彫りを施したものをを用いる。

（楠山春樹『呂氏春秋 上』三〇四頁より）

仲春以降も同様である。五行説では、春は木にあたる。木にあたるものが列挙されており、動物や数、方角、色など種類は様々である。このような記述が季節ごと、月ごとに細かく配当されている。時令にこのような記述があるだけで、時令は五行説を取り込んで完成されたことがわかる。しかし、前述したように農事暦に五行思想は見る事ができなかった。そこで、五行思想と結びつく過程を見るために、『管子』を取り上げる。『管子』幼官篇は、『管子』に見られる時令の中で最も古いとされ、戦国時代には成立していたと考えられる。この幼官篇において五行思想と関係があると思われる記述は、初めの、「五和の時節、君、黄色を服し、甘味を味ひ、宮聲を聴き、和氣を治め、五數を用ひ、黄后の井に飲み、裸獸（虎や豹）の火を以て爨ぎ、…」という部分である。「五和」は、五行が天地間で調和する意味であるし、色や味、声、数など五行の中の一つ、「土」に配当されたものが記されている。まず五行思想に基づいた記述と見ていだろう。残りの五行も第二段以降春夏秋冬それぞれに配されている。これらが記述されている段には、第一段にはなかった四季についての記述があり、「春に冬政を行へば霜ふり、秋政を行へば霜ふり、夏政を行へば闇がる。」といった違令の災害についての記述もある。他にも、十二日ごとの節氣とそれともなう政令についての記事があり、時令としての様相が表れ始めているので

ある。とはいえ、五行が配当されたものの種類は十二紀に比べると少ない。『管子』幼官篇の成立はこのあたりからも、十二紀よりは古く、五行思想結びついていく過程が見える時令資料として扱えるのではない。金谷治氏は、

しかし十二紀よりは古いということは、これまたほとんど定説である。その理由として言われていることは、十二紀の方が月ごとの整った形であるうえに、五行の配当も多種にわたっていて、時令の五行化が一層徹底しているということであった。（中略）幼官篇の方で、五行配当の種類に十干が含まれていないことと、土徳に相当する中央「五和の時節」の記事が夏と秋の間におかれていないということとは、たがいに関連したむしろ当然のこととして理解できるのである。

（金谷治『管子の研究』一三二―一三三頁より）

と述べている。十二紀の時令と幼官篇の時令を比べても、五行が配当される種類や、中央土徳が夏と秋の間に配置されていないこと、十二紀にあって幼官篇にない記述を鑑みると、幼官篇は時令と五行の結びつきが見られる初期の資料だと言えるだろう。

時令と五行思想の結びつきは、以上のような過程を経て十二紀で完成した。しかし、農事暦は四季の推移に従って、それともなう仕事を行うものであるが、四季の推移と五行の運行は数において結びつきにくいものがある。いったい時令と五行が近づいていったのはなぜだろうか。その理由として、違令の災に見られるような時令の神秘性は五行思想のそれに通じるものがあった、といった要因も

あるだろう。金谷氏はこれについて、中央と四方とに分ち書きにされていた幼官篇の形式を理由に挙げていた。東西南北に春夏秋冬を配置すると、中央に土徳を配置することは自然な発想だと言える。この形式から考えると中央に土徳を配置しやすく、五行との結びつきも想像しやすい。ここから時令に五行が近づいていったという考えは自然なのではないだろうか。

五行思想はこのような考えから時令と結びついていったと考えられる。いずれにせよ十二紀の時令には五行説が整備された形で残っている。十二紀の時令が五行思想の影響を強く受けていることは明確である。時令と五行思想の結びつきは、十二紀の時令において完成を見ることができよう。

## 第二節 時令と天人相関思想

この節では天人相関思想との関わりについて述べていきたい。まず、天人相関思想とは、天の運行と人間の営みが互いに影響しあうというもので、ここでは特に、自然の季節の変化を政治などに適用することを言う。天人相関思想もまた、時令思想を考えるには不可欠のもので、五行思想と同じく、徐々に時令思想と結合していったと見られる。時令の中に天人相関思想がどのように現れているかという、十二紀の孟春に次のような記述がある。

是の月や、以て兵を稱ぐ可からず。兵を稱ぐれば、必ず天殃有らん。兵戎起きざれば、以て我より始む可からず。天の道を變ずる無かれ。地の理を絶つ無かれ。人の紀を亂す無かれ。

孟春に夏の令を行へば、則ち風雨時ならず、草木早く穡れ、國

乃ち恐有り。秋の令を行えば、則ち民大いに疫し、疾風暴雨數々至り、藜莠蓬蒿竝び興る。冬の令を行へば、則ち水潦、敗を爲し、霜雪大いに摯り、首種入らず。

（楠山春樹『呂氏春秋 上』三頁より）

この月に挙兵してはならないことになっており、それに反すれば必ず天災が起こるということが記されている。また、孟春の月にそれ以外の季節の政令を行うと、やはり天災が起こるとしている。これは孟春における違令の災を記すものである。政令は君主、つまり人が行うものであるから、この記述を見ると人の行いが天災を引き起こすということになる。人事が天に影響を与えるという考えはまさに天人相関思想だと言えるだろう。この考え方は災異思想とも関連があるが、それについては後述する。この天と人の関係については、中国古代思想には欠かせない根幹となるものである。どの思想にも天人相関思想を垣間見ることができ、この思想は古代においては広く一般的な考え方であり、浸透していたと考えられる。それがよくわかる記述としては『荀子』を挙げたい。『荀子』天論篇において、「故に天人の分に明らかなれば、則ち至人と謂ふ可し」という記述があり、この部分が自然界の理法と人間界の理法が別物であることを言い、天論篇の中心的な命題となっているのである。荀子は、天の神秘性に関心を向けるばかりで、人々が自分で努力しないことを批判している。天と人の関係は、荀子に別物として考えるべきだと言わせるほどに密接であり、人々に影響を与えていたことになる。荀子の言からは、人々にとって天とは切っても切れない関係にあったことが逆に読み取れた。天人相関思想との連結が、時

令を説得力のある確固としたものにさせたのではないだろうか。

月ごとの農事を記しただけの農事暦は、自然の推移を意識し、自然と人間の生活をどう合わせていくか考えることによって、四時の推移に合わせての生活、政治などを定めるようになった。十二紀にある時令には、季節にあつた農事、宮廷での儀式、政令に違背した場合の災害などが挙げられているが、このような変遷をたどって完成された形なのだろう。前節の五行思想や、後述する災異思想もここに合わさり、十二紀に見られるような時令となつたのである。時令思想は天人相関思想なしには現れなかつた思想と言える。

### 第三節 時令と災異思想

この節では、同じく時令に影響を与えたであろう災異思想について簡単に考察していく。災異思想とは、自然災害や異常現象は、天の下した賞罰であるという思想で、前漢の董仲舒が有名である。災異思想は天人相関思想を理論的基盤としている。そのため、時令思想にも少なからず影響を与えていると考えられる。天人相関思想と関連していることから、『呂氏春秋』十二紀の時令において災異思想は、前節でも取り上げた違令の災に見ることができ。災異思想には、後の研究から、人事の影響がもたらす天の変動は、陰陽の気が人事に対して機械的に感応するという考えと、君主の行為が不当なとき、天がそれを正すために発する警告であるという考えの、二つの立場があるという。十二紀における違令の災は、後者であると思われる。

孟春に夏の令を行へば、則ち風雨時ならず、草木早く稿れ、國

乃ち恐有り。秋の令を行えば、則ち民大いに疫し、疾風暴雨數々至り、藜莠蓬蒿竝び興る。冬の令を行へば、則ち水潦、敗を爲し、霜雪大いに摯り、首種入らず。（同上 三頁より）

これは孟春の違令の災である。季節に合わない政策を行うと右記の通りの災害が起けると述べる。これは、君主の行為が適当でないため、天が警告の意味を込めて災害を起こしているという解釈ができるだろう。ここでもうひとつ注目したいのが、違背したときに起こる災害についてである。第二節でも取り上げたが、『管子』幼官篇の違令の災を見ると、「春に冬政を行へば霜ふ、秋政を行へば霜ふり、夏政を行へば闇がる。」といったように、具体的な災害はわからない。しかし、これを見ることで、十二紀の時令が整備された状態だと読み取ることができる。また、災異思想は『春秋』に記載される、災異の記事を解釈する学問である春秋公羊学とも関連がある。この災異とは、日食・地震・旱魃・火事・洪水などであり、詳しい災害の記述の表れが、災異思想の影響を幼官篇よりも強く受けていることと言える。とにかく、時令が天人相関思想と強く結びついていることは前述の通りである。その天人相関思想を基盤にしている災異思想も時令に影響を及ぼすということは十分に考えられる。

以上、時令と五行思想・天人相関思想・災異思想の結びつきを考察してきた。素朴な農事暦に始まった時令は、これらの思想と結びつくことで、『呂氏春秋』十二紀において時令として完成された形となつたのである。

## 第二章 『呂氏春秋』十二紀における特色

### ――諸子百家との関連から――

この節では、『呂氏春秋』十二紀の構成を見ていこうと思う。『呂氏春秋』全体には明確な編纂意識が伺えるが、十二紀においてもそれを伺うことができる。一卷に五篇あり、その首篇が時令であるから、それ以外は直接的に時令とは関わりがないように見える。しかし、やはりつながりもあつたと見るのが妥当だろう。これまで存在していた多様な思想をひとつにまとめたものが『呂氏春秋』であるから、記述されている内容は諸子百家いずれかの思想に当てはまるのではないか。ここでは、各巻の時令以外の篇が時令とどのように関係するか、季節の時令との関係も含めて触れていきたい。

まず、孟春・仲春・季春からなる春の三巻について見ていきたい。春は万物が芽吹くとき、生み出される季節である。全体としては、所々に諸子百家の言説が見えるものの、養生思想に関して述べられている。諸子百家の言も養生に関するものが多く、養生に関係する言を取り込んだと思われる。春は万物が芽吹く季節であり、生命を尊ぶ時期である。そのため、季節の持つ性質に合わせて、己の心身を大切にする養生思想を集めたのだらう。

次に、夏の三巻について見ていきたい。夏は万物が生長する季節である。孟夏・仲夏・季夏それぞれに続く篇と時令との関係性があるか考察していく。全体としては、孟夏においては学問論が一貫しており、続く仲夏・季夏は音楽論が集められて説かれている。学問・音楽とあることから、儒家説の性格が強く表れていると見ることがができる。どちらも自己を磨く、修養するという点で、万物が成

長するという夏の性質に対する配慮も少しは見られるのではないか。ここでも春と同様に、時令に対して一定の配慮は見えてとれる。

次に、孟秋・仲秋・季秋からなる秋の三巻について考察していく。秋は万物が枯死する季節である。全体としては、兵戦に関して説かれたものが集められている。このうち、季秋のみ戦勝の秘訣に関して説かれていないが、そのことを含めて、君主や人の心構えを述べたものと解釈すれば、多少の関連は見えるだろう。例外もあるが、秋の紀において兵戦に関する篇が多く見られることは、万物が枯死する季節である秋を意識していることだと思われる。

次に孟冬・仲冬・季冬からなる冬の一巻について考察していく。冬も死に因んだ季節である。全体としては、その趣旨を説いた篇が比較的多く見られる。孟冬では葬儀に関して説かれたものがあり、仲冬・季冬では義のためには死をも厭わない士について述べられているものがある。一貫して同じというわけではないが、死と関わりがあるものが多いようである。

以上、十二紀の時令以外の篇をまとめてきた。四季それぞれの時令に、すべての篇が関係するとは言えないが、相当時令に合わせた編纂となっていることは明確である。やはり、時令の後に配置する篇に、全く関係のない内容を盛り込むといったことはないようであった。時令を軸に、それを遵守するという思想があると言えるのではないか。

では、時令が各巻の首篇に配置された理由について少し考えてみたい。『呂氏春秋』は、『史記』呂不韋伝にあるように、当時数千の食客をかかえた諸国に対し、秦が強国であるのに及ばないことを羞じて、多数の食客を招き、彼らの様々な知識をもって編纂させたも

のである。諸子百家が競った多様な思想をまとめるにあたつて、なんらかの方針を立てたと推測する。そして、時令を加えるにあたつて、時令の裏付けになりそうな思想や論説を集めたのではない。か農事暦から天人相関思想や五行思想などと結びついた時令は、特定の思想家が唱え始めたものではない。そのため、時令を首篇に置くことは、比較的公平な感覚で様々な思想を効率よくまとめ上げられるメリットがあつたのだらう。このようにして時令は十二紀としてかかげられ、完成形となつたのである。

### 第三章 時令の凋落とその理由

ここまで、『呂氏春秋』十二紀における時令思想が、それまでの時令の集大成のような様相を持ち、完成された意義を述べてきた。しかし、この『呂氏春秋』十二紀の存在も、時令思想についても、漢代以降は廃れてしまつたようである。これほどまでの著作が後世あまり顧みられなかつたのはなぜだらうか。

時令に関する文献は、『呂氏春秋』成立後では、十二紀の時令をまとめた『礼記』月令篇、『淮南子』時則訓などがある。挙げた文献はいずれも漢代においての成立であり、これらを見る限り、『呂氏春秋』より後も時令は盛んであつたように見える。しかし、『呂氏春秋』そのものの研究は清代になってようやく始められ、それまでは表舞台に上ることはなかつたし、時令も漢代より後の著作は見る事ができない。しかも、『礼記』における時令も『淮南子』の場合も時令に重点が置かれてはいないのである。このように、十二紀において完成の形をとつた時令思想は、その後なぜメジャーな思想として後世に残らなかつたのだらうか。思うに、時令思想は十二

紀において完成され、細かく規定された形になつてしまつたがために、政治的には非現実となり、その煩雑さによつて表舞台から姿を消してしまつたのではないだらうか。まずは時令が煩雑であるかどうかを考えてみたい。

時令には、その月ごとに君主がなすべき政令や儀礼について詳細に規定されている。孟春の時令から内容を見ていこうと思う。まず「天子、青陽の左个に居り、鸞輅に乗り、蒼龍を駕し、青旂を載<sup>た</sup>て、青衣を衣、青玉を服<sup>お</sup>び、麥と羊とを食らふ。其の器は疏にして以て達す。」の部分では、この月はどこで政務を行うか定め、乗り物、衣服の色、食べ物、食器を規定している。続く段では立春に際して、そこで行う儀式について、準備段階から当日まで君主のなすべきことを列記している。この段は主に褒賞に関する政令を述べている。第三段では、五穀豊穡を上帝に祈願する儀式について述べられており、同じようになすべきことの記述が続いている。第四段は農事に關しての記述で、この月は天地が調和し、草木が芽を出し始めるため、君主は農事の開始を布告する。その際にも細かく注意事項がある。次の第五段は、仲春の月に行われる儀式のための準備を説き、それに続いて、生物の発育・繁殖を守るといふ目的の政令が挙げられている。次の第六段は、禁令、つまり「是の月や、以て兵を稱ぐ可からず。兵を稱ぐれば、必ず天殃有らん。兵戎起きざれば、以て我より始む可からず。天の道を變ずる無かれ。地の理を絶つ無かれ。人の紀を亂す無かれ。」というように、この月に行つてはならないことを説く。

以上が孟春の時令である。これが月ごとに変わるわけだが、内容はどの月の時令も同じような分量であり、形式もほぼ同様である。

煩雑であると思えば煩雑と見ることもできるが、その判断は不明確である。どちらかというと、煩雑さよりは時令が形式化されていることに注目すべきだろう。時令の衰退はこの要因が大きいのではないだろうか。時令の最初の形が見られた文献や『管子』幼官篇などの文献を見ても、少しずつ整備はされてきているが、十二紀のように月ごとに分かれてはいないし、儀式についての細かい記述も十二紀のみである。月ごとに分割し、さらに政令について具体的に行う儀式・部下への命令などを記すことで、整備することができ、形式が明確になったのだろう。そして、そのために時令はその後大きな発展なく表舞台から姿を消していったのではないか。時令と結びつきを示してきた他の思想はこの後も受け継がれている。五行思想は陰陽説と結びつき陰陽五行説として後も盛行している。天人相関思想の概念も残り続け、災異思想も漢代で盛行した。時令が取り残され、衰退してしまったのも人事を細かく規定してしまったために、実際に政事を行ううえで現実味を帯びなくなっていたからではないか。ここで、同時代人の批判ととれる意見を挙げておく。『史記』太史公自序の一文にこのような記述がある。

夫れ陰陽は四時・八位・十二度・二十四節、各々教令あり。之に順ふ者は昌<sup>さか</sup>え、之に逆ふ者は死せざれば則ち亡ぶと。未だ必ずしも然らず。故に曰く、人をして拘はれて畏れ多からしむと。夫れ春生じ夏長じ、秋収め冬蔵す。此れ天道の大経也。順はざれば、則ち以て天下の綱紀と為る無し。故に曰く、四時の大順は、失ふ可からずと。

（『國譯漢文大成 經子史部第十六卷』五四五頁より）

文中の教令とは、いわゆる時令のことである。これに従えば榮え、逆らえば滅ぶとされているが、未だその例を見ないと述べているのである。時令に従わなくても災害が起こらないということが続けば、時令の信憑性は揺らいでくる。時令には実用性がないとわかれば、実際に適用するにも説得力がない。そういうことが繰り返されたことで、時令は衰退の道を辿ったのだろう。また、天人相関思想などの思想が残っていることは、天道の常法はそのままで失ってはならないとする、続く文章からも理解できる。つまり時令はその大綱を承認することはできても、これが思想界を牽引するには足りないとするのである。これは、『史記』を著した司馬遷の思想も考慮しなければならぬが、時令に対する批判ととっていいだろう。『史記』編纂当時からこのような批判があったのでは、後世の時令の衰退もうなずける。

## 終章

これまで、時令思想が発展してきた過程、完成形についての意義、そしてその後の扱いについて考察してきた。一章では、もともと農業を重視する古代社会において、時令は農事暦という形で存在していたことがわかった。農事暦の観点から見ると、天と結びつけることは容易であり、天人相関思想と結びついていったことも理解できる。また、五行思想も農事暦の持つ天との親和性によって、天人相関思想と同じく結びついていったと考えられる。災異思想も、天人相関思想をベースとしているならば、時令に記述が見られるのも当然だろう。時令が農事にとどまらず、人事すべてに対して拘束性を持つようになったのも、これらの思想との結びつきがあったからで



ある。

また、第二章においては『呂氏春秋』の時令を取り上げ、十二紀に様々な思想と時令を関連付けた、編纂意識があったということを考察してきた。諸子百家の言説を網羅した『呂氏春秋』において、効率よく編纂するために時令を効果的に配置したのでないかと述べた。事実、十二紀の時令を記した首編に続く篇には、季節の時令に沿ったもの、季節の持つ性質に沿ったものが多く見ることができたとし、首篇に配置されていることで、当時の時令が占めた地位もそう低くはなかったと見ることができる。

第三章では、一時期盛行した時令思想も、時代が下るとともに凋落していったことについて考察した。『呂氏春秋』に見られるように、形式に拘りすぎてしまい現実にはぐわなくなってしまうことに、その主要な理由を求めた。『呂氏春秋』以後に成立した文献を見ると、一見まだ盛行していたように見えるが、同時代人の司馬遷の言にもあるように、現実政治を牽引する力は残っていないかったのだろう。せっかく規定した時令も、背いてしまった場合に災いが起こらなければ説得力が失われてしまう。結局、五行・天人相関思想などその他の思想は残り続け発展していったが、時令はその後表演台から姿を消してしまった。

今後は政治思想として一定の承認を得ていた時令思想がなぜ衰退してしまっただかに焦点を当て、当時の自然観や政治観と絡めて論じていきたい。

## 参考文献

金谷治『管子の研究』岩波書店 一九八七年

遠藤哲夫『新釈漢文大系 第42巻 管子（上）』明治書院 一九八九年

遠藤哲夫『新釈漢文大系 第43巻 管子（中）』明治書院 一九八九年

影山輝國『董仲舒に至る災異思想の系譜』『実践国文学』34巻 実践国文学会 一九八八年 所収

馮友蘭著・柿村峻・吾妻重二訳『中国哲学史 成立篇』富山房 一九九五年

津田左右吉『前漢の儒教と陰陽説』

楠山春樹『新編漢文選 思想・歴史シリーズ(1) 呂氏春秋 上』明治書院 一九九六年

金谷治・佐川修・町田三郎著『全釈漢文大系 第八巻 荀子 下』集英社 一九七四年

町田三郎『時令説について―管子幼官篇を中心にして―』『文化紀要』9巻 東北大学教養部 一九六二年 所収

栗原圭介『新釈漢文大系第113巻 大戴礼記』明治書院 一九九一年

谷中信一『中国古代の天人観管見』日本倫理学会編『いま「人間」とは―人間観の再検討―』慶應通信 一九九五年 所収

『國譯漢文大成 經子史部第十六巻』国民文庫刊行會 一九三二年

相原俊二『呂氏春秋』の時令説（一）『史学雑誌』76巻12号 山川出版 社 一九六二年 所収

相原俊二『呂氏春秋』の時令説（二）『史学雑誌』77巻1号 山川出版 社 一九六八年 所収

柳瀬喜代志『時令』の基礎としての政治思想―呂氏春秋十二紀の周辺―『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』21巻 早稲田大学教育学会 一九七二年 所収

片倉望『荀子思想の分裂と統一―「天人之分」の思想―』『集刊東洋学』40巻 東北大学 一九七八年